

佐賀県立博物館報 №35

佐賀市内 1丁目15番23号 TEL.0952(24)3947



寒山拾得図 長谷川雪旦 90.7×167.3

長谷川雪旦(1778-1843)は、通称後藤茂右衛門といい、名を宗秀又は良顕、画号を巖岳齋、一陽庵と用いた。

江戸の画家で、代々雪舟の画風を伝えた家系に生まれたが、とくに雪旦は画技にすぐれた法橋の位に叙せられている。

また、雪旦は江戸で唐津藩主小笠原氏の御用絵師にかかえられ、藩主のもとに於いて多くの作品を残しているが、唐津に居住したことはなかったようである。

「寒山拾得図」は、唐の憲宗時代の高僧、寒山と拾得の故事によるもので、漢画系の画題にしばしば用いられている。天台山国清寺で、ともに豊干の弟子となった寒山と拾得は、一般に椀皮を冠り粗末な衣服に木屐をはき、各々経巻と帚を手にした奇矯な姿で描かれる。

上半身だけをとりえたこの大幅も、二人の異様な姿態を大胆に、しかも濃い墨線で描ききっている。

雪旦の子雪堤に師事し、唐津に住んだ雪塘の「寒山拾得図」と比較してみるのも興味深い。

目次	● 寒山拾得図……………	1
	● 肥前の近世絵画の展開……………	2～3
	● 「肥前の近世絵画展」作品紹介……………	3～5
	● 「肥前の近世絵画展」出品目録……………	6～8
	● 日誌・行事のお知らせ・新刊書案内……………	8

肥前の近世絵画の展開

—肥前の近世絵画展から—

桃山から江戸末期に至る近世の肥前における絵画活動の展開や系譜については、江戸中期以降の長崎画派と称される唐絵目利の系譜、沈南蘋系、洋風画系の一環あるいは南画系といった、江戸期の長崎という特殊な土壌に育った典型的なあらわれを除けば、必ずしも明解な脈絡を持ってはいないように思われる。

ここで、鍋島本支藩、あるいは唐津藩に限ってみると付記した漢画系の系譜からも明らかのように、抱(かかえ)絵師の世襲または門弟による画風の継承がきわめて断続的であったことがわかる。

その背景には、狩野派に代表される幕府の御用絵師等の華麗な障壁画に較べるべくもなく、絵師として城内や邸内を彩る需めよりも、むしろ必要に応じて絵図方出役に任用され、国絵図や諸国面の作成を命ぜられるという実態があげられよう。つまり画をよくすることで抱し召えられ、一家をなし世襲するという形体は、藩政の上でさほど必要とされていないかといえる。

今回の展覧に関して、かろうじてその名を記録にとどめるだけで、遺作を発見できない漢画系の画家の多いことも、それらの事情を物語っている。

そのようななかで、まず鍋島本支藩並びに唐津藩の漢画系の絵師を概観すると、その画風は矢張り狩野派系統のものが殆んどであるといえる。

鍋島本藩においては、初代藩主勝茂、三代綱茂、八代治茂の治世に絵師の名が見られる。早くは文禄中、京狩野に学んだ元龍造寺の臣狩野文周の名があげられるが勝茂の代には葉山朝湖、狩野友巴とその門弟大園明政、小原有閑斎、広渡雪山の名が見える。しかし、朝湖は藩主の命によって江戸で狩野派の画を学び江戸に居住中、藩に対する謀計が発覚して寛永十四年(1637)頃切腹、家系は断絶している。(朝湖は龍造寺の出であったので寛永十二年龍造寺伯庵が幕府に直訴したことにかかわるか)、又明政は明暦三年(1657)勝茂に殉死しその跡が不明、承応二年(1652)本藩絵師に任用された広渡雪山は、いわゆる雪舟系統の雲谷派の画風に通じるすぐれた画才をみせたが、画でその跡を継ぐ者がなかったし、又明暦二年(1656)に本藩絵師となった有閑斎も、その系譜をつなげながらも享保年間に至って子孫友閑が贗札を作って家系断絶といった風になつても一門による継承をみることができない。

三代藩主綱茂は、自らも致徳齋と号し画をよくしたが、それに呼応してかその治世中にも絵師の名が見られる。佐賀市与賀神社縁起図を描いた永松玄徳(その子秀精は

六代藩主宗教の治世中寛保二年本藩抱絵師となる)成富独幽、成富峰雪、医術で本藩に仕えながら達磨の画をよくした馬渡高雲がいつれも元禄期の人であり、さらには元禄期の一時期ではあるが、中国から渡来した黄葉僧逸然の画風を汲む河村若元(師河村若芝は元佐賀の豪族の出と伝えられる)は綱茂に任用されている。

八代藩主治茂は文教政策に熱心であったことで知られるが、この代には林龍齋とその門弟三浦子環が絵師として仕え、子環は城内の障壁画を手がけたと伝えられる。

しかし、この治茂の治世中からすでに藩財政はきわめて悪化の一途をたどっており、それにともなって寛政期以降抱絵師の存在を見出すことができない。絵図方に籍を置く者が地図や各種図面作成等に用いられる比重が一層強まっていく過程ともいえる。

例えばその具体的なあらわれとして、九代藩主斎直の治世中の文化年間に、子環の門弟にあたる村島雪川と、他に絵図方出役と思われる胡島半十郎、増田宗閣らが、藩命により江戸で司馬江漢の門に入り、畫画法つまりは実用性に富む西洋の科学的な写実画法を学ばせられていることなどがあげられよう。

いわば文化年間以降は、愈々逼迫する対外情勢の中で長崎防備を背負わされる藩として、もはや装飾を用とする絵師の存在に目を向ける余裕もなく、全て実用の具となる絵図方の作業の方へと傾斜していくかのようである。

一方武雄邑においては、早くは広渡雪山の弟にあたる広渡心海が京都に遊学を許され、寛文四年(1664)法橋の位に叙せられ武雄邑主の抱絵師として活躍している。この心海系統は幕末期に第二十八代邑主茂順が加々良良寛に再興させ良寛心海を名乗らせて三舟心海へと続く。また二十五代邑主茂昭の絵師となった白如齋成真(文政頃)、その子と伝えられる温古齋柏山の名もあげられる。

多久邑では、邑主多久茂文により宝永五年(1708)完成した多久聖廟の天井画を描いた御厨夏園のみ名が知られる。

また、寺沢一(幕領)一大久保一松平一土井一小笠原と譜代大名による転封が多かった唐津藩では、文化十四年以降この地を治めた小笠原氏の絵師となった江戸の画家長谷川雪且が知られる。雪且は直接唐津へ向出くことはなかったようであるが、その子雪堤の門弟で長谷川氏を称した雪塀は唐津に住じこの地で維新後没している。

以上、運池藩、鹿島藩、小城藩とその他の邑を欠くが鍋島本支藩並びに唐津藩の抱絵師とその周辺の漢画系の

画家達は、最初にも述べたように、いづれもその画系が継続していないのが第一の特徴であり、画風の上では殆んどが狩野派系統のものであったと推定される。

江戸時代中期以降、十八世紀に入ってから盛んとなった南画、写生画に目をやると、文化六年に九十二歳で没した異数の人、天竜道人、京都岸派の創始者岸駒に学んだ小城出身の岸天岳、幕末期文人趣味による画を楽しんだ武富北南、成富椿屋、柴田花守は先学生島監草に学んだが、さらに椿屋は長崎遊学中鉄翁、逸雲にもついているまた佐賀の画家高柳快堂も長崎で鉄翁、逸雲に学んだが椿屋、快堂ともその遺作はむしろ維新後のものが多見さ

れる。

肥前の洋風画の承譜は、これも長崎を除けば今のところ何ら具体的な例を見出すことが出来ない。しかし、文化年間に江漢に師事した村島ら三人を出発点として、洋風画というよりも洋風の写実表現への接近といったものは、近代的な藩政改革にともなう蘭学の導入に呼応して強力に押し進められていたと見るべきであろう。

最後に栄錦と藤堂と称する二人の画家が幕末期に佐賀において浮世絵風の画を描いていたと伝えられるのも、近世最末期の世相と関わる事象といえよう。

「肥前の近世絵画展」

作品紹介



与賀神社縁起図

永松玄徳 197.0×160.7



野馬図屏風 雲谷等顔 146.7×345.5



山水図
長谷川雪旦
94・4×32・3



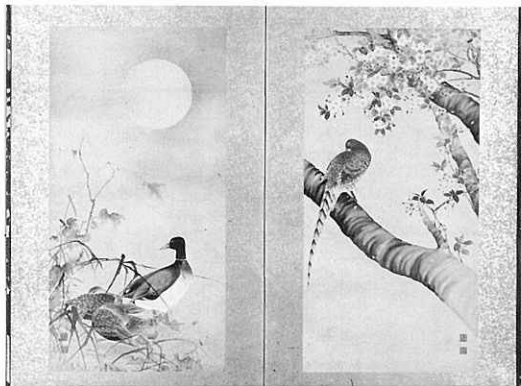
秋景山水図
日高鉄翁
126・0×42・5



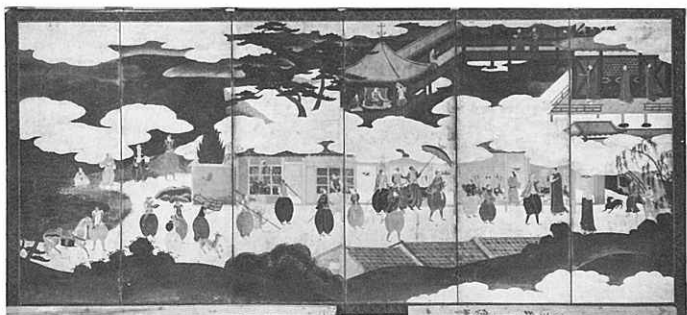
山水図屏風
広渡心海



若鷹初渡・鳥群図
草場佩川
124・0×48・2



花鳥芦雁図屏風
古川松根
128.0×64.2



南蛮人来朝图 筆者不詳 155.0×351.0



万国人物图(部分) 依荒木如元 34.0×1225.0

肥前の近世絵画展出品目録

漢画系									
1	蓮池水禽	松浦等	掛幅	双幅	紙本	墨画	各105.5×43.0cm		
2	肥前名護	狩野光信	屏風	六曲一隻	紙本	淡彩	162.0×270.0	佐賀県立博物館	
3	野馬園	雲谷等	屏風	六曲一隻	紙本	淡彩	各146.7×345.5	京都国立博物館	
4	楼閣山水	筆者	屏風	六曲一隻	紙本	墨画	139.4×49.8		
5	賀茂競馬	園屏風	"	"	紙本	金地着彩	108.3×266.0	鍋島報效会	
6	親桜園	園屏風	屏風	六曲一双	"	"	各188.0×265.0		
7	山桜園	園屏風	"	"	紙本	銀地着彩	各161.5×356.0		
8	洛中洛外	園屏風	屏風	六曲一双	紙本	金地着彩	各154.3×358.4		
9	洛中洛外	園屏風	屏風	六曲一隻	"	"	154.9×360.2		
10	藤棚園	園屏風	屏風	二曲一隻	紙本	着彩	152.3×84.8		
11	忽来関	狩野文周	掛幅	一幅	絹本	着彩	67.5×35.5		
12	人物園	粟山朝湖	掛幅	"	紙本	墨画	116.0×49.3		
13	河上	小原有閑	掛幅	一幅	絹本	着彩	41.6×65.5	鍋島報效会	
14	竜天善神・白山	観楯園	掛幅	双幅	紙本	着彩	100.0×46.5		
15	騎馬人	園" "	掛幅	一幅	掛幅	一幅	65.4×30.3	佐賀県立博物館	
16	鍋島勝茂	肖像" "	"	"	紙本	墨画	46.8×18.7		
17	夏景山水	園" "	広渡	雪山" "	"	"	97.5×46.0		
18	楊柳觀音	園" "	"	"	"	"	82.1×30.2		
19	山水園	園" "	"	"	絹本	淡彩	34.2×54.8		
20	山水園	園" "	"	"	紙本	墨画	36.7×56.0		
21	与賀神社	縁起園	永松玄徳	園" "	絹本	着彩	197.0×160.7		
22	麒麟鳳凰・竜亀	園" "	鍋島綱茂	掛幅	双幅	絹本	着彩	各128.0×52.0	
23	神農	園" "	"	掛幅	一幅	"	54.3×37.0		
24	諸葛孔明	園" "	"	"	"	"	91.8×33.7		
25	豊干之	園" "	河村若芝	"	"	"	37.5×64.3	長崎県立美術博物館	
26	松竹梅双鶴	園" "	河村若元	"	紙本	着彩	113.0×44.7	"	
27	摩利支天	園" "	三浦子璣	"	"	"	114.5×38.2		
28	騎馬人	園" "	"	額	一面	絹本	着彩	42.0×87.8	
29	虎園(裏面人物)	園" "	筆者	不詳	衝	立	148.3×145.7		
30	人物園	園" "	"	杉戸絵	二面	"	各177.3×129.0		
31	松鶴・竹亀	園" "	狩野典信	掛幅	双幅	絹本	着彩	144.1×67.8	
32	四季孔雀	園屏風	狩野高信	屏風	六曲一双	紙本	金地着彩	各151.5×345.6	
33	祇園祭礼	園" "	筆者	不詳	屏風	六曲一隻	123.8×246.4		
34	慶園屏風	園" "	筆者	不詳	屏風	八曲一隻	164.0×279.0		
35	富士山	園" "	山本若麟	額	一面	絹本	淡彩	46.0×60.5	
36	竹虎園	園" "	筆者	不詳	杉戸絵	二面	着彩	各158.5×84.5	武雄市
37	松鷹園	園" "	"	"	"	"	"	"	
38	富嶽園	園" "	長谷川雪且	掛幅	一幅	絹本	着彩	53.5×86.2	"
39	山水園	園" "	"	掛幅	双幅	絹本	墨画	各94.4×32.3	
40	山水園	園" "	"	"	"	"	各105.2×43.7		
41	秋景山水	園" "	"	掛幅	一幅	紙本	淡彩	134.0×43.5	
42	鶴に寿老人	園" "	"	掛幅	三幅対	絹本	着彩	各96.4×35.8	
43	孔子園	園" "	"	掛幅	一幅	"	89.8×36.5		
44	牛園	園" "	"	"	"	"	103.8×40.2		
45	寒山拾得園	園" "	"	"	紙本	墨画	90.7×167.3		
46	寒山拾得園	園" "	長谷川雪塔	"	紙本	墨画淡彩	92.2×175.8		
47	侍女園	園" "	"	額	一面	紙本	着彩	58.4×119.7	
48	能舞園	園" "	"	屏風	二曲一双	"	各157.5×136		
49	花鳥園	園" "	"	掛幅	一幅	絹本	着彩	117.5×41.0	
50	忠比寿園(草場船山畫)	園" "	"	"	"	"	162.6×47.9		
51	山水樓閣園	園" "	広渡心海	"	紙本	淡彩	125.7×56.7	武雄市	

52	牧	牛	画	広渡 心海	掛幅 一 幅	紙本 着彩	104.5×38.5	武雄市 "
53	山水	屏風	"	"	屏風六曲一 隻	紙本 淡彩	各161.7×365.0	
54	山	雁	画	"	屏風六曲一 隻	"	163.5×376.0	
55	芦	水	画	白如斎成貞	掛幅 一 幅	"	116.5×37.5	
56	琴	棋	画	"	"	"	"	
57	桐	二	画	温古斎柏山	杉戸絵二 面	着 彩	158.7×48.3	
58	牧	牛	画	"	"	"	164.0×87.0	
59	牡丹	山	画	"	"	"	159.0×84.7	
60	牡丹	稚子	画	"	"	"	161.7×81.8	
61	富	士	画	温故 斎	掛幅 一 幅	紙本 淡彩	43.0×60.5	
南画・写生画系								
1	鶏	子	画	伊藤 若冲	掛幅 双 幅	紙本 墨画	各129.0×51.0cm	長崎県立美術博物館
2	唐獅子	画	長沢 芦雪	屏風六曲一 隻	"	"	107.5×35.2	
3	藻	鯉	画	天竜 道人	掛幅 一 幅	絹本 着彩	102.5×43.0	
4	菊	菊	画	"	"	絹本 墨画	102.5×43.0	
5	松	鶴	画	岸 良	屏風六曲一 隻	紙本金地着彩	各154.5×357.2	
6	虎	画	岸 天岳	掛幅 一 幅	絹本 墨画	129.0×41.8		
7	鶴	画	"	"	絹本 墨画	127.5×52.2		
8	月	春	画	"	屏風六曲一 隻	紙本 淡彩	156.2×354.0	
9	秋	山	画	日高 鉄翁	掛幅 一 幅	絹本 着彩	126.0×42.5	
10	雪中	山水	画	"	"	絹本 墨画	106.8×36.1	
11	梅	煎茶	画	三浦 梧門	"	絹本 着彩	109.0×34.5	
12	秋	山水	画	木下 逸雲	"	"	124.6×40.2	
13	花蝶	(牡丹に猫)	画	"	"	"	151.0×56.3	
14	竹	屏風	画	草場 佩川	屏風六曲一 隻	紙本 墨画	各154.0×362.0	
15	西王母	画	"	額 一 面	"	"	35.0×53.2	
16	若鷹初獲	鳥群	画	"	掛幅 双 幅	絹本 着彩	各124.0×48.2	
17	花鳥	雁	画	古川 松根	屏風二曲一 隻 (押絵貼)	紙本 着彩	各128.0×64.2	
18	婦人肖像	画	"	掛幅 一 幅	絹本 着彩	99.2×40.0		
19	宮廷人物	画	"	"	"	116.2×48.3		
20	花鳥	画	成富 椿屋	"	"	"	141.0×83.0	
21	松	鶴	画	"	"	絹本 淡彩	136.5×48.8	
22	海辺群鶴	画	筆者 不詳	横十 面	紙本 着彩	各171.3×87.0		
23	海辺群鶴	画	高柳 快堂	屏風六曲一 隻	"	"	132.5×312.6	
洋風画系								
1	南蛮人來朝	画	筆者 不詳	屏風六曲一 隻	紙本金地着彩	各155.0×351.0cm	長崎県立美術博物館	
2	樹下双猿	画	沈 南 蘋	掛幅 一 幅	絹本 着彩	87.9×105.8	"	
3	麒麟之	画	"	"	"	138.7×161.6	"	
4	梅竹に鳥	画	"	"	"	113.0×44.4	"	
5	喜報三元	画	熊 斐	"	"	62.5×93.7	長崎県立美術博物館	
6	雪中鷹ノ	画	"	"	紙本 着彩	124.8×42.3	"	
7	竹	画	"	"	紙本 墨画	121.0×30.8	"	
8	柳に鶏	画	宋 柴 石	"	絹本 着彩	67.0×137.0	長崎県立美術博物館	
9	花鳥	画	"	"	"	105.0×36.8	"	
10	寿老人	画	筆者 不詳	"	"	117.5×80.2	"	
11	デ・フィネネーフェ夫妻	画	石崎 融思	"	"	50.0×33.3	長崎県立美術博物館	
12	駿河湾より見た富士之景	画	司馬 江漢	"	紙本 淡彩	52.4×94.7	"	
13	錦帯橋	画	"	額 一 幅	絹本 着彩	64.2×86.9	"	
14	鷹匠	画	若杉五十八	額 一 面	油彩 画布	61.7×42.0	"	
15	洋人行楽	画	伝若杉五十八	"	"	54.0×153.0	長崎県立美術博物館	
16	万国人物	画	伝尾木如元	卷子 一 卷	紙本 着彩	34.0×125.0	"	
17	平安福寿	画	"	掛幅 一 幅	絹本 着彩	191.1×53.6	"	
18	三番叟	画	原 南嶺	掛幅 三幅 封	絹本 着彩	各99.7×27.0	長崎市立博物館	
19	瀉血手術	画	川原 慶賀	額 一 面	紙本 着彩	87.0×50.0	長崎県立美術博物館	
20	ブロンホフ夫人	画	"	"	"	94.3×49.3	"	

浮世絵、その他					
1	二美人図	藤川 春章	掛幅 一幅	絹本着彩	33.5×42.2cm
2	浅草年之市正月図	歌川 豊国	掛幅 双幅	"	各115.5×66.5
3	美人図(ヘンミ讃)	"	掛幅 一幅	"	97.5×36.2
4	雄図(久世通理讃)	酒井 抱一	"	"	84.5×3200
5	竹園(千種有功讃)	"	"	絹本墨画	122.0×42.5
6	伏草園	"	掛幅 双幅	絹本着彩	各106.3×41.8
7	東海道名所風景 絵貼交屏風	"	屏風六曲一双	"	各35.7×24.8

博物館日誌

1月15日	「九州の原始文様展」開場 「成人の日」のため常設展無料公開	2月24日	「九州の原始文様展」終了(総観覧者数3,570名) 51年度常設展「佐賀県の歴史と文化展」終了 (51年度総観覧者数13,136名)
1月25日	福岡市立歴史資料館長 三島 格氏来館	3月5日	「肥前の近世絵画展」開場 「肥前の近世絵画展」記念講演会 「九州の文人画と洋風画について」 講師：九州芸術工科大学教授 岸田 勉氏
1月29日	博物館協議会開催		
1月30日	「九州の原始文様展」記念講演会 「縄文時代における西北九州と大陸との交流について」 講師 慶応義塾大学教授 江坂輝弥氏		
2月4日	文化庁文化財調査官坪井清足氏来館		講師 帝塚山大学講師 狩野博幸氏
2月21日	相知町せせり谷出土経文修理完成		

●行事のお知らせ

() 内は団体料金20名以上

展覧会名		会期	観覧料	備考
肥前の近世絵画展		3月5日～3月30日	大人 250 (150) 大・高生 150 (100) 中・小生 100 (50)	会期中無休
佐賀大学 教育学部	土肥春嶽教授 退官記念展	3月12日～3月16日	無料	会期中無休
	美術卒業制作展	3月18日～3月21日	無料	会期中無休
佐賀美術	県勤労者 美術展	3月25日～3月29日	無料	会期中無休

●新刊書案内「肥前の近世絵画」

「肥前の近世絵画展」の図録として刊行。

カラー写真4枚、モノクロ写真136枚を含め100頁。

桃山から江戸末期に至る近世の肥前出身画家、雲谷等
 顔をはじめ広渡雪山、広渡心海、長谷川雪旦等を、また
 肥前に伝承されてきた中央作家のすぐれた作品を加え、
 漢画系、南画・写生画系、洋風画系、浮世絵その他等の
 四つの系統に分けて掲載している。

また、肥前出身画家の系譜・略伝、肥前の近世絵画展
 関係年表・出品目録を付すなど肥前の美術史の研に供
 している。頒価1,000円(送料は別、総重量430g)

博物館報	第35号
発行年月日	昭和52年3月15日
編集	大園 弘
発行	佐賀市城内1丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	日之出印刷株式会社